

Title	「障害」概念を介した障害理解のための拡張的学習の試みⅠ：障害児・者に対する学生の意識的態に関する調査から
Author(s)	石川, 由美子 金谷, 京子 村山, 順吉
Citation	聖学院大学論叢,21(3) : 79-87
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=920
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

「障害」概念を介した障害理解のための拡張的学習の試み I

— 障害児・者に対する学生の意識的態度に関する調査から —

石川 由美子・金谷 京子・村山 順吉

Conscious Attitudes of Welfare and Early Childhood Education Students toward
People with Disabilities

Yumiko ISHIKAWA, Kyoko KANAYA, and Junkichi MURAYAMA

WHO endorsed the International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF) in 2001. It puts the notion of disability in a new light, i.e. in a context of a universal human experience of living. In response to this new view of disability, universities of welfare and education are required to offer expansive learning programs toward a better understanding of people with disabilities.

We conducted a preliminary survey of conscious attitudes of welfare and early childhood education students toward people with disabilities in order to develop expansive learning programs.

The subjects were 146 students. They were asked to answer a questionnaire on images of disability whose items required response on a 5-point Likert-type scale.

Three factors were identified through factor analysis: identification with social vulnerability, identification with difficulty in daily activities, and attitudes of students toward people with disabilities.

The results showed that the students tended to regard disability as a personal issue or as a burden that an individual happened to bear.

Key words: attitude, factor analysis, people with disabilities, expansive learning

はじめに

障害をどのように捉えるのか

WHO（世界保健機関）は、障害理解のモデルとして、1980年に国際障害・機能障害・ハンディ

「障害」概念を介した障害理解のための拡張的学習の試み I

キャップ分類 (ICIDH) を提示した。これは、障害を機能形態不全、能力低下、社会的不利の3次元で捉える視点を示したものである。このモデルによって、障害を個人の問題としてのみ捉えるのではなく、機能不全や能力低下からもたらされる生活の困難さ (社会的不利) の視点で捉えようとする視点が開かれたといえる。しかし、その一方で、機能不全や能力低下から引き起こされる社会的不利という見方が一方向的であり、医学モデルに基づくものであるとの批判にも晒されてきた (上田, 2005; 前川, 2008)。

そこで、WHO による2001年の国際障害分類改訂版 (国際生活機能分類: ICF) では、「医学モデル」と環境の要因を重視した「社会モデル」を統合した「相互作用モデル」を提案している (図1)。

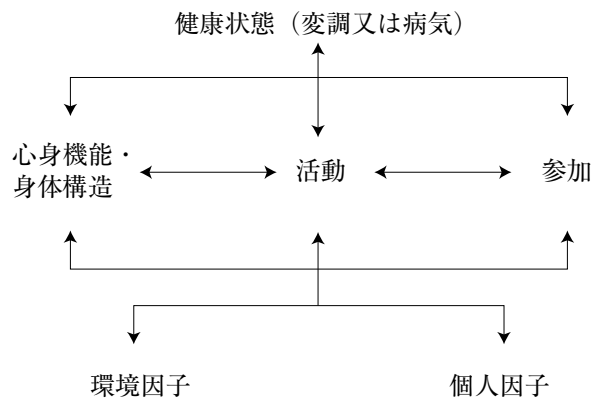


図1 ICFの構成要素間の相互作用モデル

前川 (2006) は、ICF の特徴を、人間の生活機能を心身機能・身体構造、活動、参加という3つの次元に分類し、それぞれを生物 (生命)、個人 (生活)、社会 (人生) の次元に対応させ、障害という表現ではなく、中立的な生活機能という用語を用いているところにあると述べている。また、ICF モデルのすべての構成要素が、相互に関連しあい影響していると考えることの重要性について述べている。

WHO の国際障害分類にみられる「医学モデル」から「相互作用モデル」への変更の提案は、障害を個人の問題から一方向的に派生する、つまり個人に帰す考え方から、生活機能という、人と人が影響し合う関係性の視点から考えようとする大きな転換を示したものと考えられる。このことによって、障害をもつ人々と我々 (そうでない人々) の間の関係性が大きく変わる可能性があること、また、障害そのものが実は、人々の間で流動的に変わる可能性のあるものとして捉えられる、ということを示したと考えられる。

障害に関する意識的態度に関する研究

障害児・者が地域の中で、充実した人生を歩んでゆくためには、障害児・者ととも地域で暮らす人々の障害児・者への態度といったものが重要になる。地域の中で障害児・者ととも暮らす人々の彼らに対するイメージ・意識・態度を明らかにしようとする研究がなされている。

知的障害者を対象とした意識・態度の研究では、障害者に対する人々の態度が多次的であることを示した研究がある（生川・安川内、1992；生川1995；Hastings, Sjostrom,& Stevenage;1998）。生川・梅谷・前川（2006）は、これらの態度の研究のレビューから、多次的に抽出される態度の内容として、Ⅰ. 好意-非好意、Ⅱ. 肯定-否定、Ⅲ. 統合-分離、Ⅳ. 社会的距離、Ⅴ. ノーマライゼーション、Ⅵ. 原因論、Ⅶ. 能力・性格の7つのカテゴリーに分類できるとした。そして、態度次元に与える影響として、障害者に接触する経験の有無、性差などがあることを示した。

豊村・佐藤（2008）は、生川らの多次的な態度に関する知見に基づき、多次的な態度が発達的に変化するかどうかに関して、小学生から大学生までの身体障害者（肢体不自由）への態度の横断的調査を報告している。これによって障害者の能力の肯定から次第に「共生」への意識へと態度の変化が起きていることを示唆した。

小野（2007）は、福祉系専門学生の障害者イメージを調査し、回答者の自己評価得点が高いほうが、障害者に対するネガティブなイメージを回答する割合が低いことを明らかにした。

これらの研究では、意識、態度、イメージといった異なる用語で障害者に対する一般の人々の意識を含む態度（意識的態度）を表現していると思われる。このような意識的態度の研究は、障害児・者に向かう側（一般の人々）の意識的態度が、障害児・者の地域での生活に影響を与えることを明らかにした。障害児・者の回りにいる人々が、障害をどのように捉えるかによって、障害児・者との実際の関わりが変化する。「共に生きる」ことが、障害児・者にとっても我々にとっても意味深いものとなったり、ならなかったりする。この結果の一端が、我々の側のかかわり（意識的態度）の問題でもあることを明らかにした。

「障害とは何か」の理解に向けて

医療・福祉系や教育を学ぶ学生には、障害理解に向けて障害児保育、障害児教育、障害児・者援助技術論といった科目が提供されている。しかし、教える側の教員は、WHOのICIDHで盛んに学んでいた世代であろう。現場で働く人々も同様である。また、今、大学生である学生においてもそのような社会概念的背景で成長している。先に述べたようにICIDHは、個人の疾患から生じる機能低下からの能力の問題といった視点から、さらに社会的不利の視点を提案したという功績がある一方で、個人の疾患に帰す一方向的な見方であるとする批判を受けてきた。これは、我々自身（障害をもつ人、一般の人々）がこのような概念枠組みにとられることなく新たなモデルの思考枠組みに如何にすれば転換できるのかを問われているということでもあろう。

「障害」概念を介した障害理解のための拡張的学習の試み I

「医学モデル」から「相互作用モデル」への転換，それは知識的概念的に理解できたとしても，体験的にどのような実感をもつものであるかは，誰もが，試行錯誤を重ねて身につけて行かねばならない課題ともいえる。そのような中で，授業としてこのようなパラダイム変換にどのように対応するのかを考えていくことは重要である。

障害をもつ方々と共に生活する社会において，障害児・者自身が主体的に生きている実感が，もちろん一番重要なことではある。それと共に，障害児・者を取り巻く他者が，如何に障害児・者を受け止め，障害とは何ものであるのかについて理解し，そして共に生活する中で自分自身への肯定的な受け止めまでを体験できること，このような学習プロセスを展開できることが，ICFの「相互作用モデル」の本質的捉え方となるのではないかと考えられる。

本研究では，障害理解のための拡張的な学習を開発するための基礎研究として，福祉・教育を目指す大学生の障害に対する意識的な態度を明らかにしていく。

目 的

保育士および幼稚園教諭を目指す大学生が障害児・者に対して抱いている意識的な態度を質問紙調査に基づき明らかにする。その結果から，新たな障害理解のための拡張的学習の方向性を検討する。

方 法

対象 保育士および幼稚園教諭を目指す大学生76名（2年生）と短大生70名（2年生）。

大学生については，まだ実習経験はないが，短大生については各10日間の保育園，施設の実習経験があった。

方法 調査票に使用した項目は，2005年度の障害児保育の授業を履修した学生が障害という言葉でイメージする，とした記述資料に基づいて，障害のイメージを整理し22項目を作成したものである（資料1参照）。

作成したそれぞれの項目について5件法を用いて評価してもらうこととした（1.とてもそう思う，2.ややそう思う，3.どちらでもない，4.あまりそう思わない，5.全く思わない）。

結 果

初めに，本調査の目的にあった因子を選択するため，22項目に対するクローンバックの α 係数の値を算出したところ0.62であった。信頼性が低いと判断された項目2，6，7，12，14，19を除いて

表1 障害児・者に対する大学生の意識的態度

	第1因子 社会的な弱さをもつ者	第2因子 生活への困難をもつ者	第3因子 障害児・者に対する心理的態度	共通性
13. 偏見	0.80	0.03	0.27	0.34
18. 抵抗	0.55	0.15	0.43	0.47
8. 邪魔なもの	0.54	0.26	0.20	0.58
16. かわいそう	0.54	0.34	0.22	0.40
1マイナス・重いイメージ	0.52	0.25	0.08	0.41
11. 乗り越える壁が多い	0.07	0.71	-0.03	0.51
5. 大変そう	0.29	0.66	0.26	0.71
10. 時間がかかる	0.15	0.61	0.13	0.45
3. 不便そう	0.34	0.56	0.21	0.51
20. 避けたい	0.25	0.07	0.71	0.57
21. みないふりしたい	0.20	0.19	0.67	0.52
因子寄与	2.1	1.9	1.4	5.5
因子寄与率	19.3	17.5	12.9	49.7

(因子抽出法：主因子法，バリマックス回転)

再び算出したクロンバックの α 係数は0.86となった。その後、因子分析を試み、項目15と22の因子負荷量が低かったために分析からはずすこととした。本調査では、最終的に11項目を因子分析（主因子法，バリマックス回転）の対象とした。11項目のクロンバックの α 係数は0.85であった。表1に11項目の因子分析の結果を示した（主因子法，バリマックス回転）。

表に示したように3因子が抽出された。第1因子は、項目1「障害という言葉にマイナスあるいは重いイメージがある」、項目8「障害は邪魔なものというイメージがある」、項目13「障害児・者に差別や偏見を感じてしまう」、項目16「障害児・者にかわいそうと感じる」、の5項目からなった。これらの項目の内容から第1因子は、社会的な弱さのある者とした。

第2因子は、項目3「障害があると生活するのに不便そうである」、項目5「障害があると生活するのに大変そうである」、項目10「障害があると何事にも時間がかかる」、項目11「障害があると乗り越えなければならない壁が多い」、の4項目からなった。これらの項目の内容から第2因子には、生活への困難をもつ者とした。

第3因子は、項目20「障害児・者を避けたい」、項目21「障害児・者とあったら、みないふりをしてしまいたい」、という2項目からなった。これらの項目の内容から第3因子には、障害児・者に対する心理的態度と名づけた。

この結果から、大学生には、障害をもつ人々に対して、社会的な弱さのある者、生活に困難をも

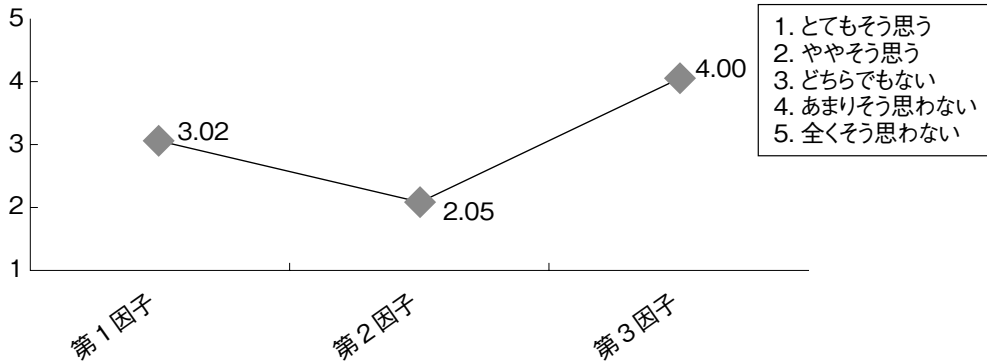


図2 各因子内の項目全体の平均値

つ者といった意識，そして，それらの方に対して持つ心理的な態度がある，ことが明らかとなった。

図2は，それぞれの因子を構成する項目全体の平均値を図に示したものである。これによると，第1因子においては，全体の平均値が3.02であり，標準偏差が1.08であった。第2因子は，全体の平均値が2.05であり，標準偏差が0.88であった。第3因子については，全体の平均値が4.00であり，標準偏差が0.97となった。この結果から，第1因子については，障害児・者を社会的な弱さをもつ人と意識する学生と，そのような意識はしないとする学生がいることが示唆された。第2因子については，学生のほとんどが障害によって生活に困難をもたらすと考えていることが示された。そして第3因子については，学生のほとんどが，障害児・者に対して避けたいといった心理的態度は持たないという意識が働くことが示された。

これらの結果に実習経験の有無が関連するかどうかを確認するために，短大生と大学生の各因子内の項目間の平均値の差の検定（t検定）を実施した。どの因子についても，短大生，大学生で項目間の有意な差は認められなかった。従って，本結果は，実習経験の有無には影響されないとことが示された。

考 察

障害をもつ方たちに対する大学生の意識的な態度として，抽出された3因子（社会的な弱さのある者，生活に困難のある者，障害児・者に対する心理的態度）をみると，生川ら（2006）でまとめられた7つに分類された多次元カテゴリーに，おおむね含まれる内容といってよいと考えられる。これらの因子は，学生の実習経験で左右されるものではなかったことから，社会的文化的な制約の中で成長した彼らの現在の意識的な態度とみなすことが可能であろう。

大学生は，障害をもつ方たちが生れながらにして社会的に弱さをもち，それが故に，社会的な生活を送る上で絶対的な困難を持っていること，そして健常である自分たちの側が彼らに対してある

面において心理的な距離感を持つことを、認識している。これらのことは、まさに ICIDH の医学的モデルから派生しているような一方向的な流れをもっている。障害を個人に帰す考え方から抜け切れていないことを示していると考えられた。

大学生は、第1因子である障害児・者の社会的な弱さについては、そう思う部分とそうではないかもしれないという部分で葛藤している。第2因子である障害児・者の生活の中での困難さについてはそれが自明のこととして受け入れている。これは、生活の中で出会う障害児・者の生活の様子や障害体験学習などが影響しているのではないと思われる。第3因子では、障害者に対する心理的な態度を肯定的にしようとする努力をしていることが、示唆された。

障害理解のための授業展開として、視覚障害者体験、車椅子体験、白杖体験などの体験学習が福祉系大学では行われている。このような体験学習の授業は学生に障害児・者の身になって考える重要な視点を与えてくる。また、その体験からどのような支援をしてあげられるのかを考えるために多くの学びの場を与えてくれる。しかし、相互作用という場、人と人のかかわりの間に障害という意味づけがなされるという体験や学習は、既存の体験学習では難しいと考えられる。このような結果から、教授する側の授業展開のあり方などを積極的に転換する必要があると考えられた。

総合的考察

本研究においても、障害児・者といった表現を使用しているのだが、本来、この表現自体から検討していかなければならないのであろう。障害児・者と健常者といった区分する概念が対立する思考を孕む。WHO の ICF モデルは、生活機能という視点を障害児・者と健常者の間の媒介項として提案している。これは、将来、障害の有無ではなく、人と人の相互作用で生じる生活機能の問題を生活する中で改善するという考えさえすればよいという、社会の実現を目指すものでもあるのであろう。

そのような観点から、障害とは何か、障害理解を促すための拡張的な学習は、人と人との間に生じる障害という視点で捉えなおす必要があると考えられる。障害という実体は、疾患を持つ個人がいるからあるのではない。障害は、人と人が関わるその中でそれらのかかわりの中で生じることもあるし、全く生じることがないかもしれないものである。かかわりの中でそのような幅のあるものであるということを教授する拡張的な学習の試みが必要である事が、本研究から示唆されたと思われる。

今後は、人と人との間で生じる「障害」といったテーマで障害を捉える拡張的な学習の具体的方法を開発、提案していきたいと考えている。

文献

- Hastings, R.P., Sjostrom, K.E., & Stevenage, S.V.(1998) Swedish and English adolescents' attitudes toward the community presence of people with disabilities. *Journal of Intellectual Disability Research*, 42(3), 246-253.
- 前川久男 (2006) 障害の理解の意義と方法, 1-16. 前川久男編, 講座 特別支援教育 2 特別支援教育における障害の理解. 教育出版.
- 前川久男 (2008) 心理学測定・評価と支援とは, 22-37. 長崎勤・前川久男編著, シリーズ障害科学の展開第5巻 障害理解のための心理学, 明石書店.
- 生川善雄・安河内幹 (1992) 精神薄弱児(者)に対する態度と接触経験・ボランティア経験との関係に関する研究—福祉保育教育系女子大生の場合—. *発達障害研究*, 13 (4), 102-109.
- 生川善雄 (1995) 精神薄弱児(者)に対する健常者の態度に関する多次元的研究—態度と接触経験, 性, 知識との関係—. *特殊教育学研究*, 32(4), 11-19.
- 生川善雄・梅谷忠勇・前川久男 (2006) 知的障害者に対する態度に関する文献研究—態度の多次元的研究に焦点をあてて—. *千葉大学教育学部紀要*, 54, 15-23.
- 小野美和 (2007) PD101 福祉系専門学生の自己認知と障害者に対するイメージとの関連(1), *日本教育心理学会総会発表論文集* (49), 412.
- 障害者福祉研究会編 (2002) ICF 国際生活機能分類—国際障害分類改訂版. 中央法規.
- 豊村和真・佐藤真衣子 (2008) 障害者に対する態度に関する横断的研究 (1), *北星論集* (社), 45, 77-87.
- 上田敏 (2005) KS ブックレット NO.5 ICF の理解と活用—人が「生きること」「生きることの困難(障害)」をどうとらえるか—. *きょうされん* (発行), 萌文社 (発売).

障害についての調査

資料1

1. とてもそう思う
2. ややそう思う
3. どちらでもない
4. あまりそう思わない
5. 全く思わない

当てはまる数字を（ ）に入れてください。

1. 障害ということばにマイナスあるいは重いイメージを感じる。 ()
2. 障害ということばにプラスあるいは明るいイメージを感じる。 ()
3. 障害があると生活するのに不便そうである。 ()
4. 障害がある人は自分の意志を強く持っている。 ()
5. 障害があると生活するのに大変そうである。 ()
6. 障害があることでかえって好きなものに集中できる。 ()
7. 障害は生きるパワーを与えてくる。 ()
8. 障害は邪魔なものというイメージがある。 ()
9. 障害を持つ人は努力家でがんばりやである。 ()
10. 障害があると何事にも時間がかかる。 ()
11. 障害があると乗り越えなければならない壁が多い。 ()
12. 障害のある人はきれいで・純粋なところがある。 ()
13. 障害児・者に差別や偏見を感じてしまう。 ()
14. 障害児・者も私も何にも変わらない。 ()
15. 障害児・者に対して怖いと感じる。 ()
16. 障害児・者にかわいそうと感じる。 ()
17. 障害児・者を友達のように思える。 ()
18. 障害児・者に抵抗を感じる。 ()
19. 障害児・者といっしょにいると楽しい。 ()
20. 障害児・者を避けたい。 ()
21. 障害児・者と偶然に出会ったら、みないふりをしてしまいたい。 ()
22. 障害児・者にどう関わっていいかわからないと思う。 ()

あなたは障害児・者に関わる機会をもっている。 ある・ない (どちらかに○)

(ex. ボランティアをしている, 友人や家族に障害をもつ方がいる, 家庭教師をしているなど・・)

あなたは今までに障害に関する科目を学んだことがありますか。 ある・ない (どちらかに○)

いつごろ:

科目名: